

# 『絵引』成立過程についての一考察 (1)

——日本常民文化研究所所蔵資料から

窪田 涼子

はじめに

日本常民文化研究所（以下常民研とする<sup>(1)</sup>）が世に送り出したいくつかの仕事のうち、大きな特色をもつものとして『絵巻物による日本常民生活絵引』（以下『絵引』とする）がある。一九八〇年代にはいつてから特に歴史学の分野で注目されはじめ、歴史学における絵画史料について活発に議論がおこる端緒ともなった。

『絵引』は当初、角川書店『絵巻物全集』の附録として六四（昭和三九）年に刊行されたが、常民研が神奈川大学に委譲されてから〈新版〉というかたちで体裁を整えて八四（昭和五九）年に平凡社より再刊されている。角川書店版と平凡社版は、内容的には同一のもので、画家村田泥牛氏の筆になる原画が使用され、原画は現在神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されている。

この刊行につながる仕事は、五五（昭和三〇）年一二月から、澁澤敬三、宮本常一、河岡武春氏らが中心になり、澁澤邸において月一回開かれていた「絵巻の会」で継続して続けられていた。有賀喜左衛門によれば<sup>(2)</sup>、澁澤は晩年こ

れに最も力を注ぎ、多忙な公務のなかこの研究会はほとんど欠席せず、話し合いはいつも澁澤が中心で行われたという。非常な熱意を傾けていた澁澤は、しかし、第一巻の刊行を待たずに六三（昭和三八）年死去した。

このようなかたちで刊行された『絵引』は、実は企画としては第二次にあたるもので、戦前に企画され作業がすすめられていた、いわば〈第一次の絵引〉のあったことが、すでに知られている。しかし〈第一次の絵引〉のために準備されていた原画は、戦災に遭い焼失したとされてきた。

神奈川大学日本常民文化研究所では、このたび第二次『絵引』の原画の再整理を行ったところ、村田泥牛氏の筆とは異なる『絵引』原画を見出した。これらの原画は八四年に平凡社版の刊行にともなって原画の点検を行ったとき、『絵引』には未掲載の原画として一括処理されそのまま収蔵されていたものであるが、これらは間違いなく、戦災で焼失したなかから難を逃れたもので、戦前に澁澤から委嘱され原画の作成にあたった橋浦泰雄の手によるものであると思われる。これまで行方が判らないとされてきた橋浦の原画を、今回は全点紹介したい。

#### 幻の『絵引』——第一次『絵引』構想

そもそも『絵引』は、澁澤の発想にかかるものである。澁澤がこれを着想したのは三五（昭和一〇）年頃と推定され、<sup>(3)</sup>「絵巻物研究会」が四〇（昭和一五）年にはじまっている。澁澤は当時を回想して、次のように述べている。

たしか昭和十五年頃からであつたろう。画家で且つ民俗学者である橋浦泰雄さんに交渉して、絵巻物各種を一巻丹念にアチック同人で検討してはその決定に従い同君にブラックアンドホワイトで一つ一つ複写して頂くことにした。画家だけでもまた民俗学者だけでも一寸都合が悪い。両方を兼ねる点で橋浦さんはうってつけの方であつた。何回か会合して注文し、出来上るにつけて之をキャビネ判の印画紙に写し、それを土台としてこれに細かく番号をつけた。着物に、帯に、履物に、持ち物に、猫に、茄子に、柴垣に、舟またはその付属品にと云った

風に。

（『絵引は作れぬものか』）

これによれば、このとき原画を描いたのは橋浦泰雄であったことがわかる。橋浦泰雄といえ、マルクス主義者にして画家であり、戦前はプロレタリア美術運動に中心的に携わる一方、柳田国男の門下で「民間伝承の会」創立に参加し、編集長、事務局長をつとめ、『日本の家族』『日本産育習俗資料集成』などの編著書をもつ人物である<sup>(4)</sup>。

橋浦が『絵引』原画を描くに至った理由は、宮本常一によれば<sup>(5)</sup>、四〇（昭和一五）年頃、柳田周辺の大間知篤三、守随一らは相次いで満州に渡っており、橋浦は雑誌『民間伝承』の編集を一人で支えていた。その橋浦までもが家を建てた借金のために渡満することとなったが、その事態を宮本から聞いた澁澤が、構想中の絵引原画を描く仕事を橋浦に依頼し、橋浦の渡満を留めたという。そして橋浦は実際に月一回はアチックへやってきて「絵巻物研究会」に出席するようになったというのである<sup>(6)</sup>。

四一（昭和一六）年、社会経済史学会の講演で澁澤は『絵引』の構想を披露した後、「『石山寺縁起』、『絵師草紙』、『信貴山縁起』および『餓鬼草紙』の四つほどまとまりました。いずれ出版したい考えであります」と述べているところから、研究会開始から順調に作業が進んでいたことが読みとれる。

また、全体の構想も出来上がっていたようで、「……およそ常民的資料と覚しきものだけを集め、一定数ごとに印刷しこれを前述の通り番号を附し、巻末に近代的名称による分類によって対象物を羅列し当該番号を示した索引をつける構想にほぼ定めた。（中略）履物を例にとるなら、わらじ類、ぞうり類、あしなカ類と項を分け番号を示しておけば、あしなカ類はどの絵巻の何巻と何巻に出ていてその実体がすぐ見られる趣向である」（『絵引は作れぬものか』）と後に述べている。

## 原画焼失から第二次『絵引』へ

しかし、戦争が激化してくると同人達も次々に戦地へ行ってしまう、アチックの活動も休止状態になっていった。そして四二（昭和一七）年には「アチックミューゼウム」という名称を「日本常民文化研究所」と改称せざるをえなくなる。「絵巻物研究会」の活動がいつ頃まで続けられたのかは今のところ不明であるが、澁澤によれば「そのうち戦時状態が悪化し遂にこの仕事も中断してしまった。その原稿のかなりの部分は防空壕に入れてかえって焼いてしまうことも起こった」とあるように、全体構想もでき、橋浦による原画がかなりの枚数出来上がっていた『絵引』の事も、大部分の原画焼失という事態のなか、中止せざるをえなかったのである。

四五（昭和二〇）年一〇月、澁澤は幣原内閣の大蔵大臣となり、翌四六年五月まで在職する。辞任直後の公職追放から五一（昭和二六）年の追放解除を経て、澁澤は財界人として数々の要職を歴任するようになる。そのような多忙な公務のなかでも、実現しえなかった『絵引』に対する思いは消えるどころか、ますます募っていったようで、五四（昭和二九）年にはさきほどから引用している随想「絵引は作れぬものか」を書く。その最後は次のように結ばれている。

この仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチュアの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはつきりさせる点で、誰でもいいから一度は完成しておく後から勉強する方々の助けになると思う。各絵巻の原本を披見するは云わずもがな、信頼し得る複製を供覧して彼此相検討するにさえ並々ならぬ労力と時間を要する。便利な字引というものが出来ている世の中に、あえて昔日の杉田玄白先生が字引を手写して苦心されたように、いちいち絵巻物を繰りひろげて廻らないでも用を便ずる絵引があつたらと今でも思っている。

この一年後、先にみたように、第二次『絵引』の実現へと動いていくのである。



### 橋浦の筆になる『絵引』原画

このたび見いだされた原画は全一四点で、それとは別に「青焼き」が一八点ある。もともとなる絵巻物とその点数は、「北野天神縁起絵巻」三五点、「石山寺縁起」三四点、「絵師草紙」二一点、「信貴山縁起」二八点、「餓鬼草紙」六点、青焼きは一八点すべてが「西行物語絵巻」である。澁澤の回想に「(『絵引』の) 原稿が出来上がった」として挙げられている絵巻は「法然上人絵巻」以外すべて今回見いだされたので、素材にした絵巻の種類としてはこの程度かと思われるが、第二次『絵引』の原画が八〇〇点以上になることから考えて、一つずつの絵巻から抽出した点数はもっと多かったものと推定される。澁澤の言葉の通り、大部分は焼失してしまったのであろう。

また、橋浦の筆になるものと、第二次『絵引』の原画を比較すると、両者の筆致の違いが明らかである。これは橋浦と村田泥牛の、訓練や関心などの違いによると推定しているが、詳細は別稿で述べたい。

さらに、橋浦の原画と第二次『絵引』原画とは、元になっている場面は同じでも、切り取り方や省略、抽出の仕方が異なっているものが多い。たとえば「北野天神縁起」巻八・二八紙を例にとろう。図1は本来の絵巻の当該場面であるが、そこに細線で囲んであるのは橋浦の原画が抽出した部分、破線で囲んであるのは第二次『絵引』で抽出した部分である(番号は、へゝ数字が橋浦原画、○数字が第二次『絵引』の番号にあたる)。たとえば細線へ51は本来は離れた位置に描かれる部分を抽出し一枚の原画に収めているが、第二次『絵引』になると⑤⑤と⑬⑬に分割され、⑬⑬には別の部分加わる、といった具合である。

このように、『絵引』はあくまで絵巻からの抽出であり、その抽出にはその時の研究会の議論の行方などがかなり反映しているとみてよい。このことは『絵引』はあくまでも『絵引』であるということを、改めて認識させるものである。

次に橋浦筆『絵引』原画を示す。図は絵巻ごとにまとめ、図の下に絵巻物略名と図番号(たとえば、信貴山-1は

信貴山縁起の一枚目」を記入し、そのあとに（一）にいられて、対応する第二次『絵引』（現行の平凡社版『絵引』）の当該番号を示した。ただ先述のように必ずしも一対一で正確に対応するわけではないので、参考程度である。

また最後に挙げた「西行物語絵巻」の一八枚は、原画そのものではなくいわゆる「青焼き」のかたちで残っていたため、他に比べ画像が鮮明でないことをお断りしておく。

絵巻略名 信貴山縁起 ↓ 信貴山

餓鬼草紙 ↓ 餓鬼

北野天神縁起 ↓ 北野

絵師草紙 ↓ 絵師

石山寺縁起 ↓ 石山寺

西行物語絵巻 ↓ 西行

## 註

- (1) 日本常民文化研究所の名称は、一九四二（昭和一七）年からの使用で、それまではアチックミュージアム (Atic Museum) と称していた。「常民研」と「アチック」は基本的に同じ組織のことである。
- (2) 有賀喜左衛門「絵引によせて」『新版絵巻物による日本常民生活絵引』。
- (3) 澁澤敬三「絵引は作れぬものか」『澁澤敬三著作集』第三巻所収。
- (4) 橋浦泰雄の動向については、福田アジオ「日本の民俗学とマルクス主義」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第二七集、一九

九〇年）、鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』（人文書院、一九九八年）などに詳しい。

（5） 宮本常一「橋浦さんのこと」『鳥取民俗』第二号（橋浦泰雄先生追悼号）一九七九年。

（6） 橋浦の『絵引』への具体的な関わりについては別稿を予定している。

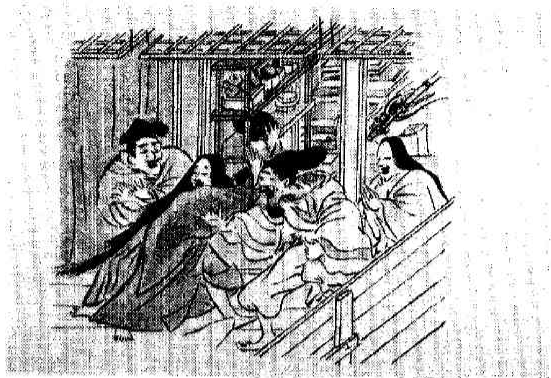
（7） 「所感——昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて」（『澁澤敬三著作集』第一卷所収）

（くぼた・りょうこ 日本中世史）

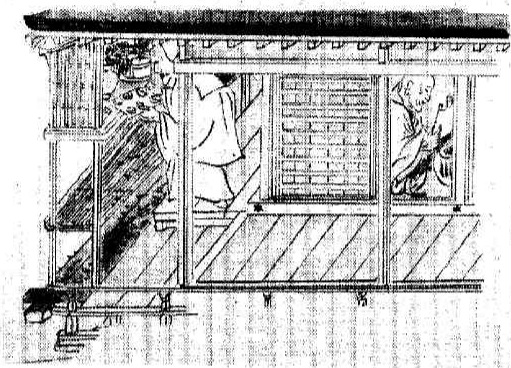
图 1 『北野天神縁起』卷八

破線と○数字——第二次絵引  
実線と△数字——第一次絵引

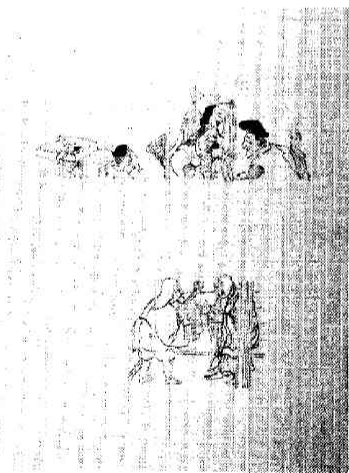




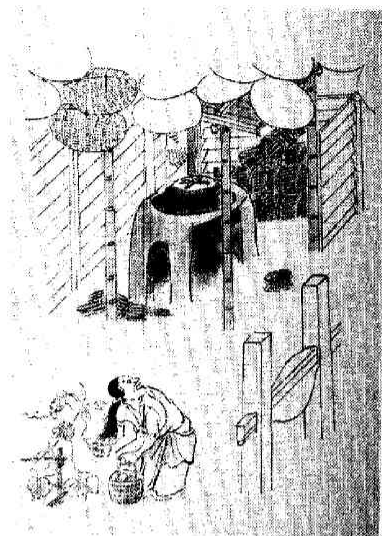
信貴山-4 (67)



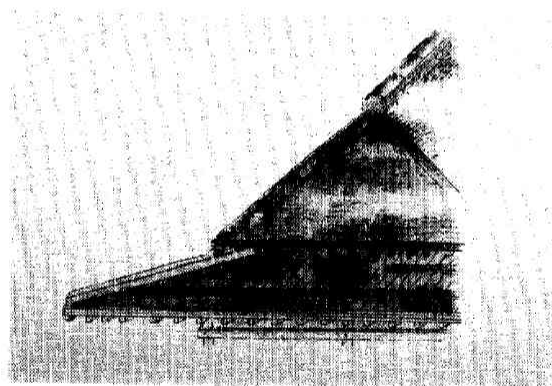
信貴山-5 (68)



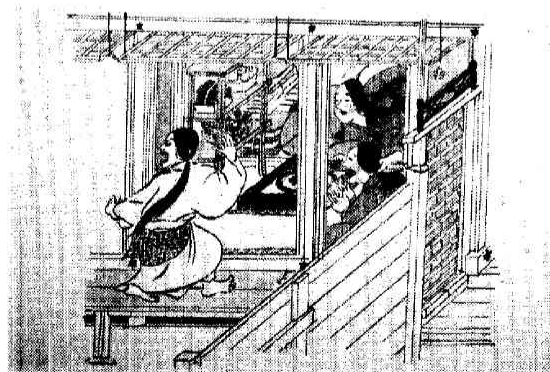
信貴山-6 上 (89) 下 (69)



信貴山-1 (64, 73)

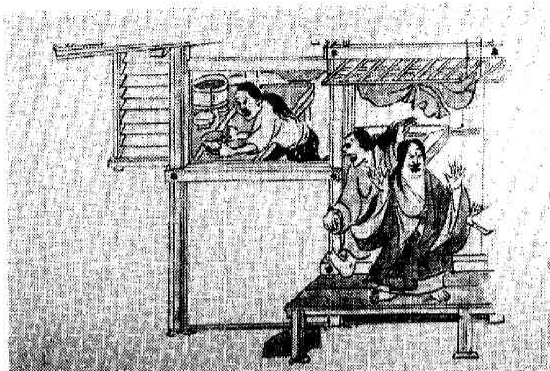


信貴山-2 (65)



信貴山-3 (66)

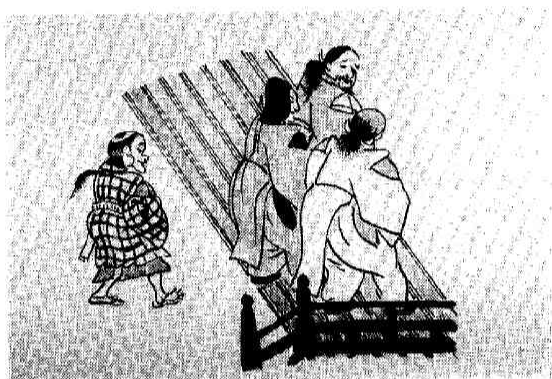




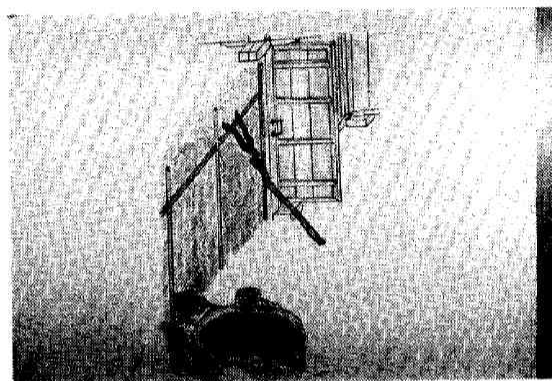
信貴山-11 (74)



信貴山- 7 (70)



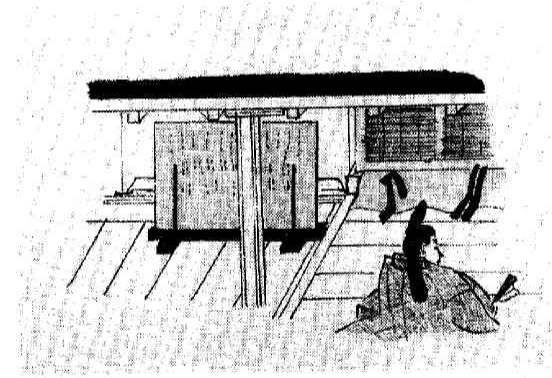
信貴山- 12 (75)



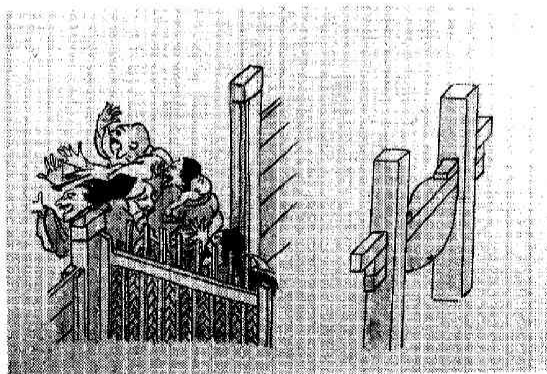
信貴山- 8 (70)



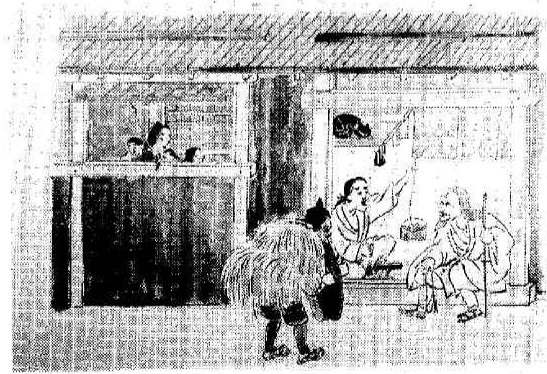
信貴山-13 (76)



信貴山- 9 (71)

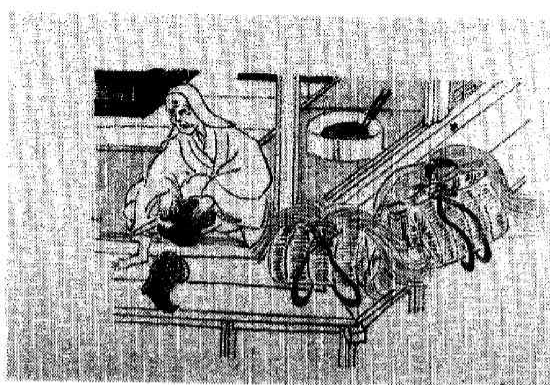


信貴山-14 (77)



信貴山-10 (72)

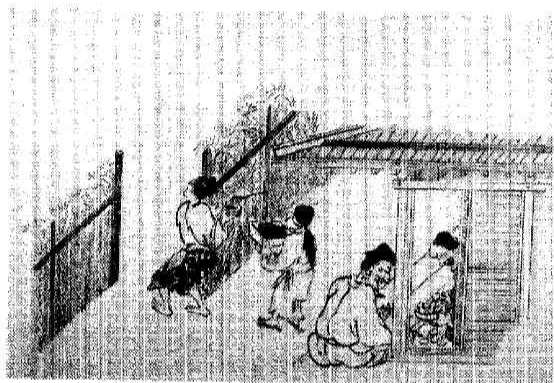




信貴山-19 (83)



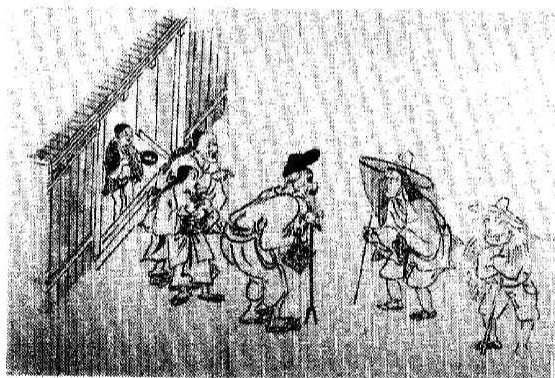
信貴山-15 (78)



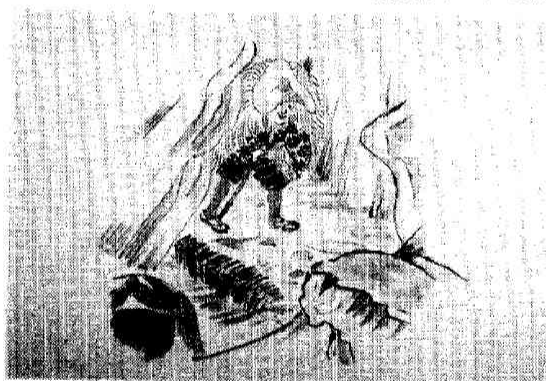
信貴山-20 (84)



信貴山-16 (79)



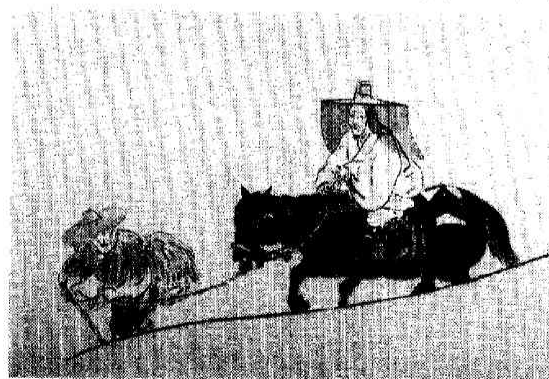
信貴山-21 (85)



信貴山-17 (81)



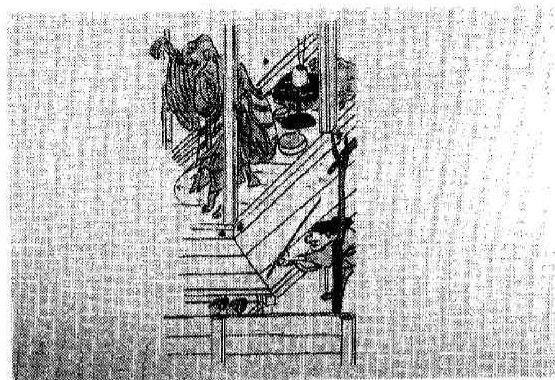
信貴山-22 (86)



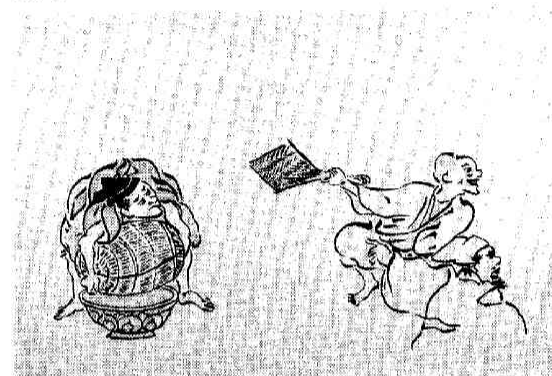
信貴山-18 (82)



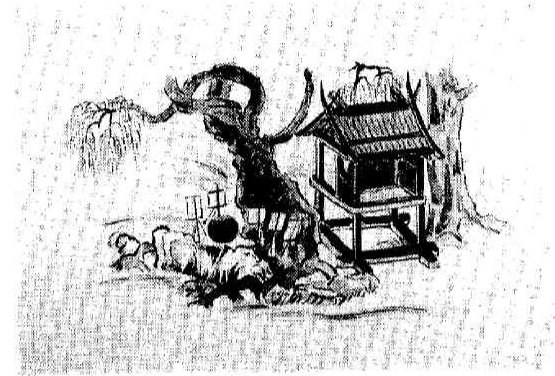
信貴山-27 (92)



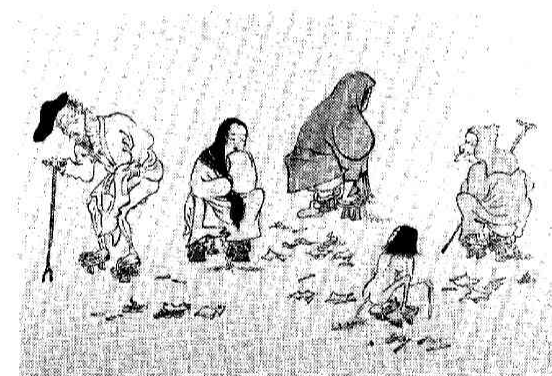
信貴山-23 (87)



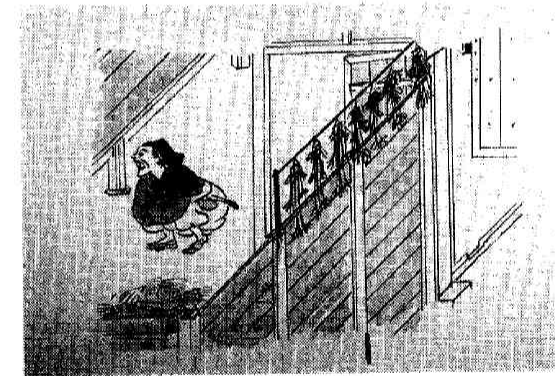
信貴山-28



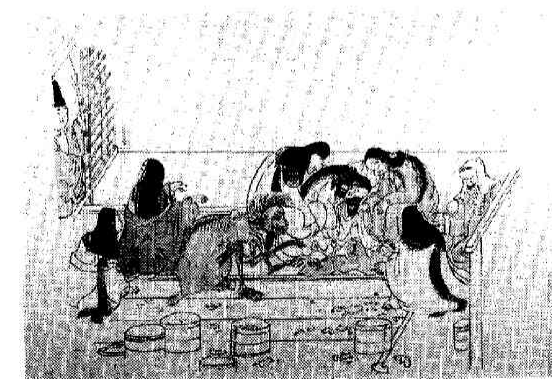
信貴山-24 (88)



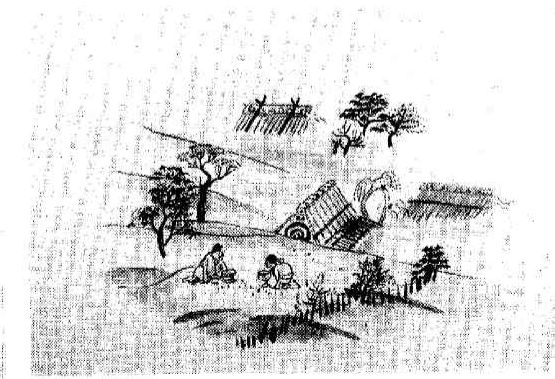
餓鬼-1 (93)



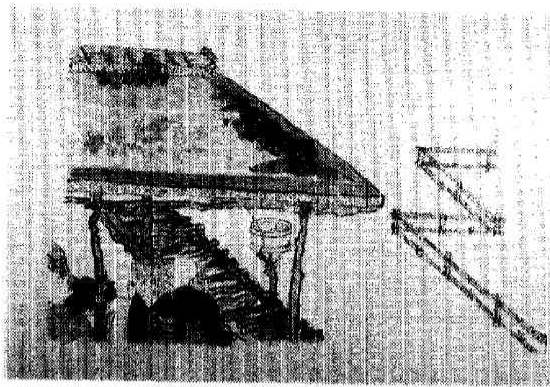
信貴山-25 (90)



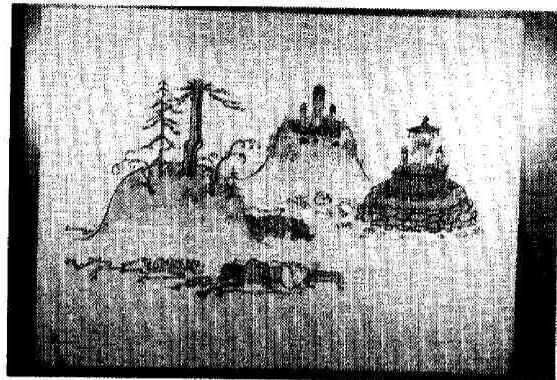
餓鬼-2 (94)



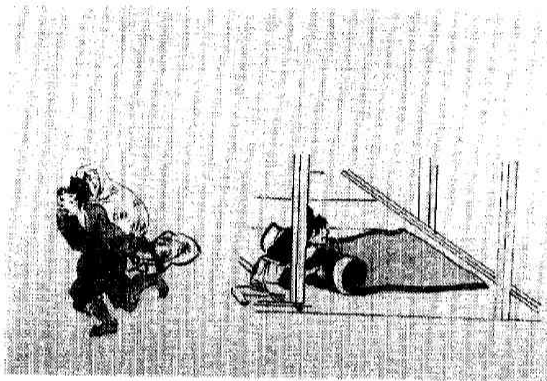
信貴山-26 (91)



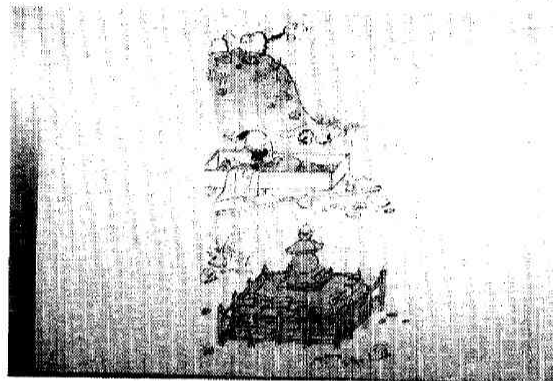
北野-1 (99)



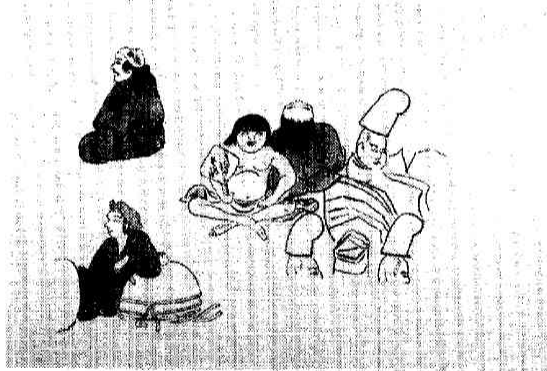
餓鬼-3 (95)



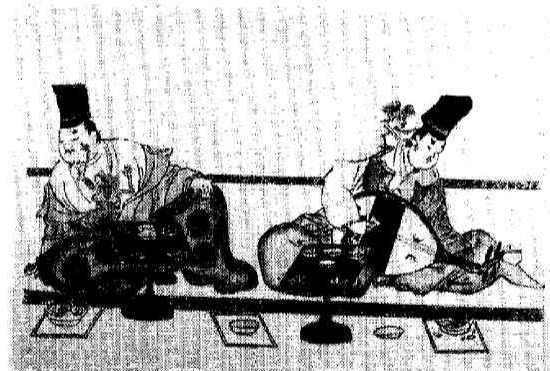
北野-2 (101, 132)



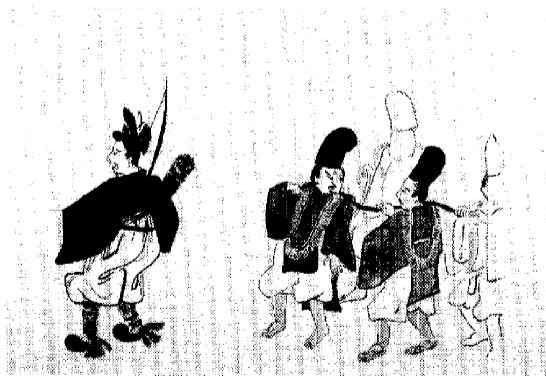
餓鬼-4 (96)



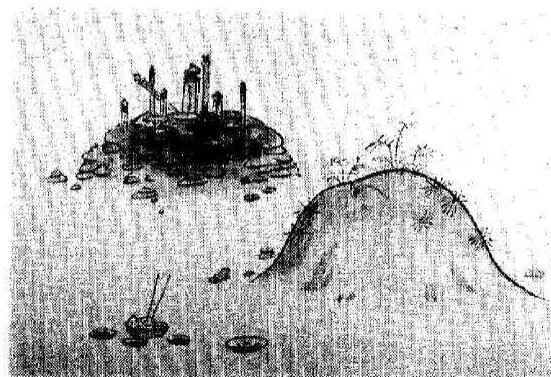
北野-3 (102, 151)



餓鬼-5 (98)

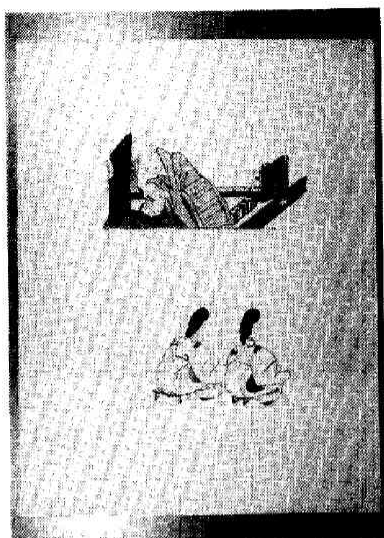


北野-4 (104)



餓鬼-6

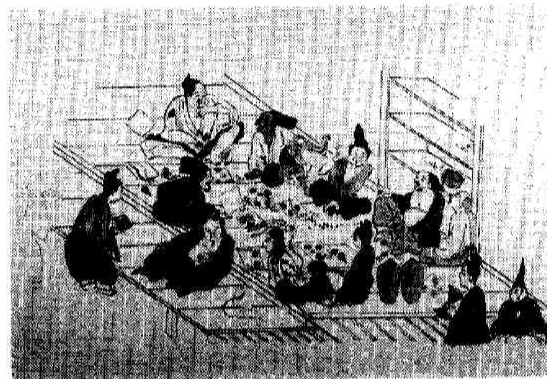




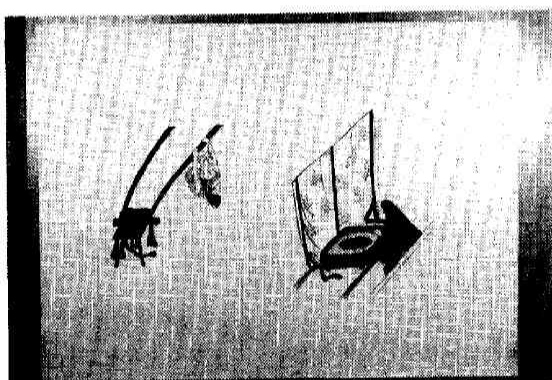
北野-8 (117, 157)



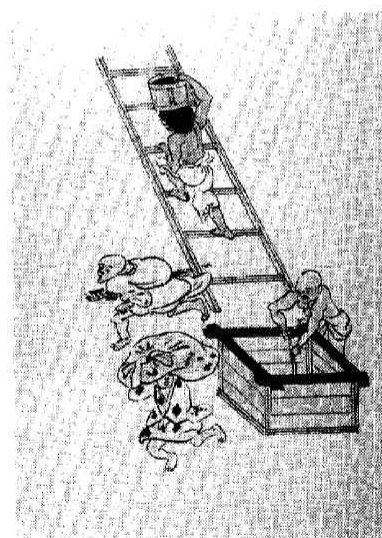
北野-5 (107, 127)



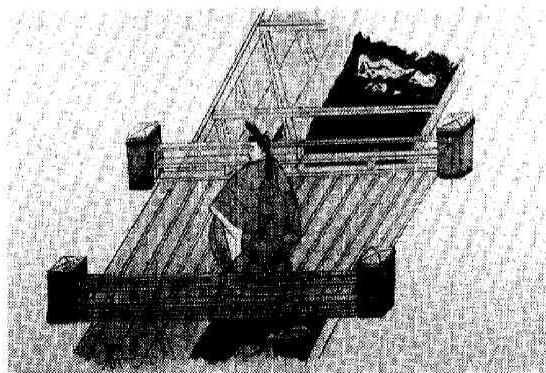
北野-6 (112, 113)



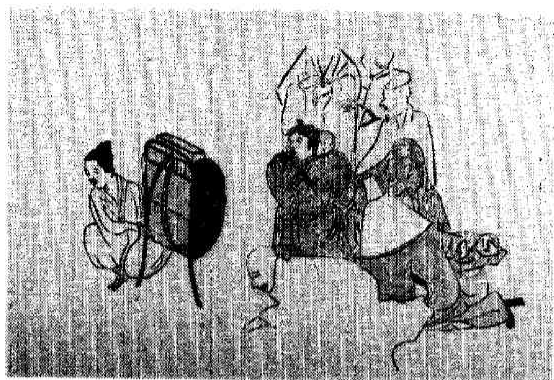
北野-9 (118, 136)



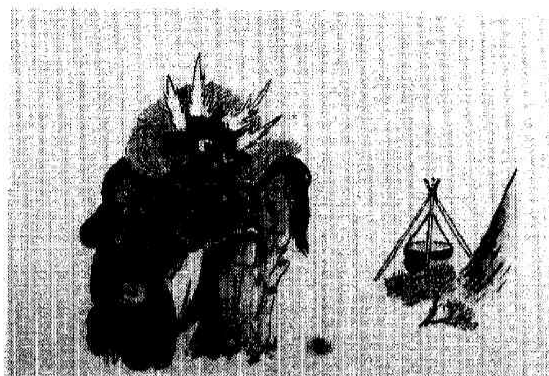
北野-7 (115, 126, 131)



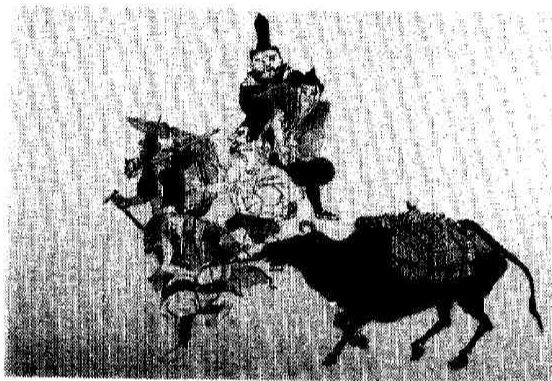
北野-10 (120)



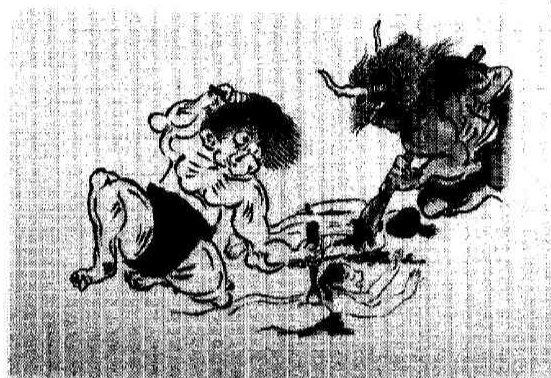
北野-15 (127, 133)



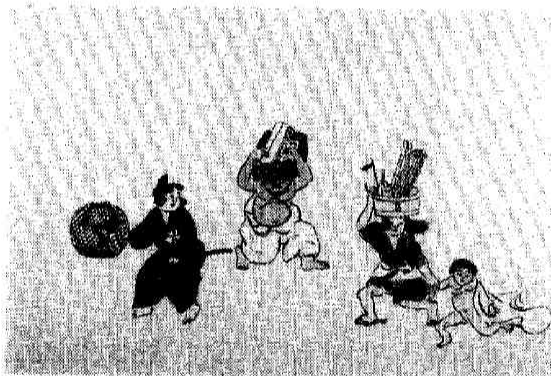
北野-11 (122)



北野-16 (128)



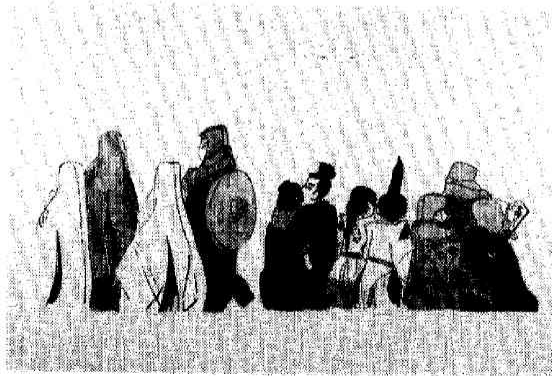
北野-12 (123)



北野-17 (131, 155)



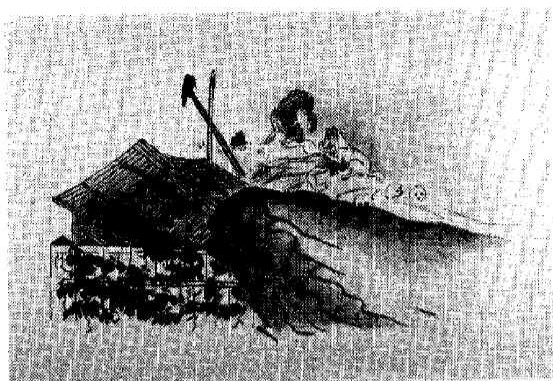
北野-13 (124)



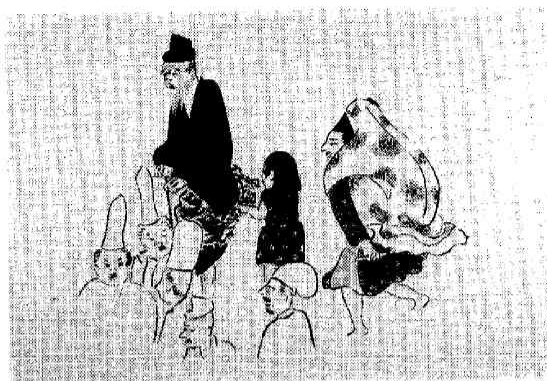
北野-18 (132)



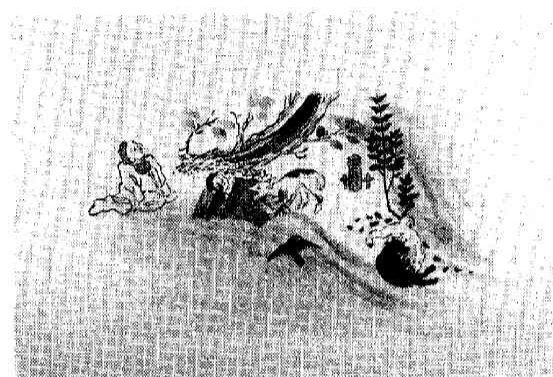
北野-14 (125, 154)



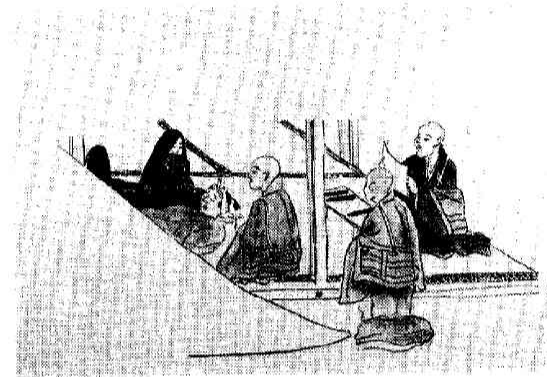
北野-23 (146, 147)



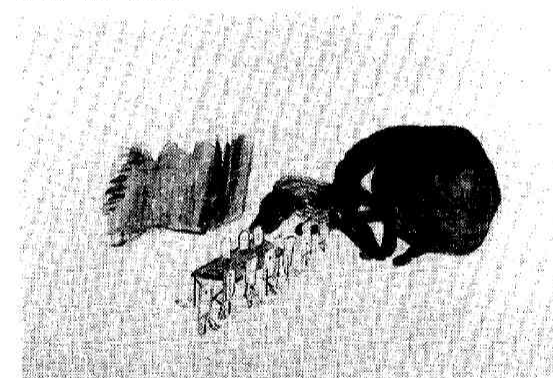
北野-19 (133)



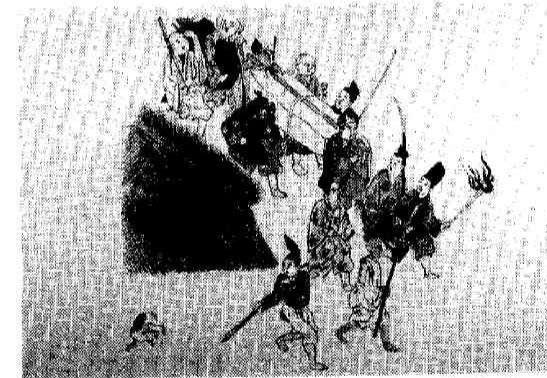
北野-24 (146)



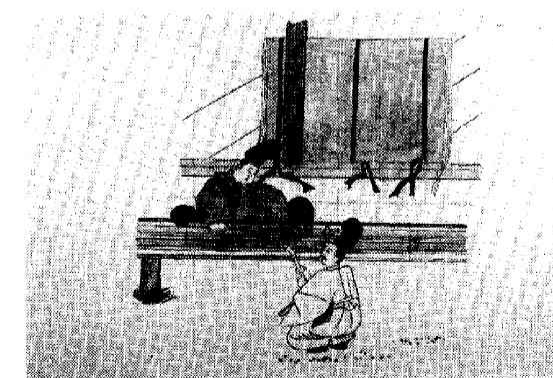
北野-20 (143)



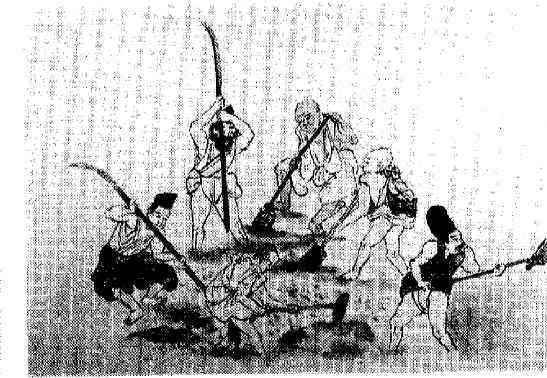
北野 25 (149)



北野-21 (144)

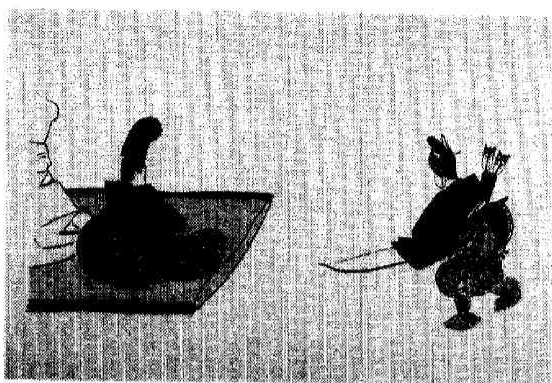


北野-26 (153)



北野-22 (145)

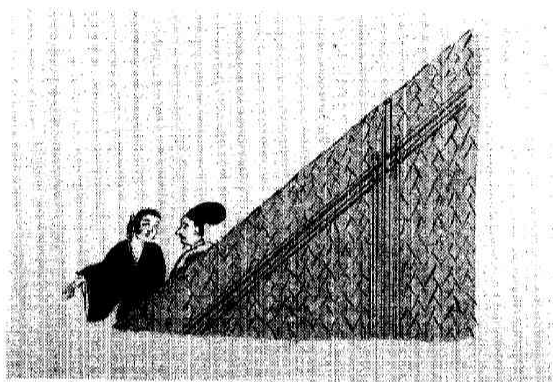




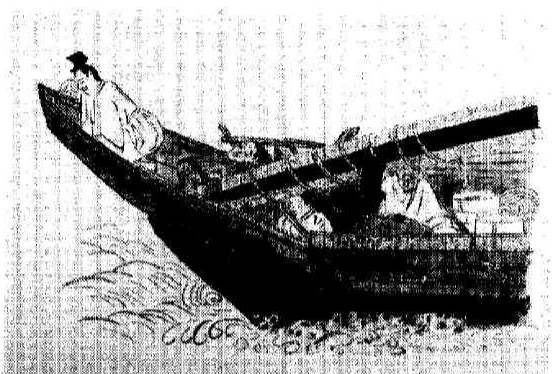
北野-31



北野-27 (156)



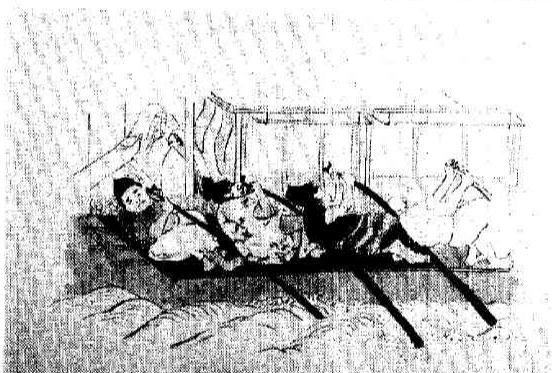
北野 32



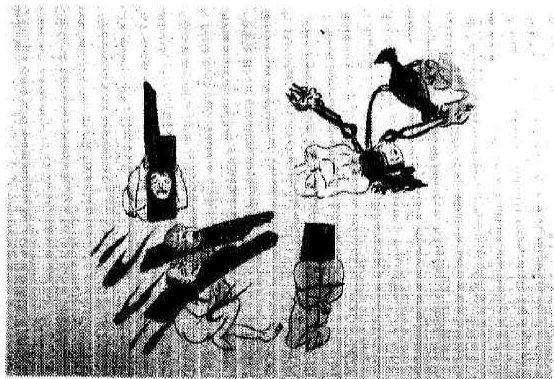
北野-28 (162)



北野-33



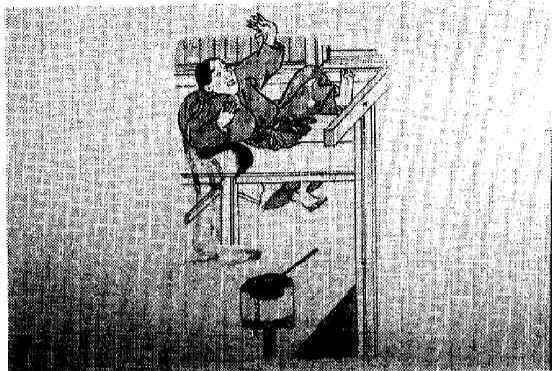
北野 29 (162)



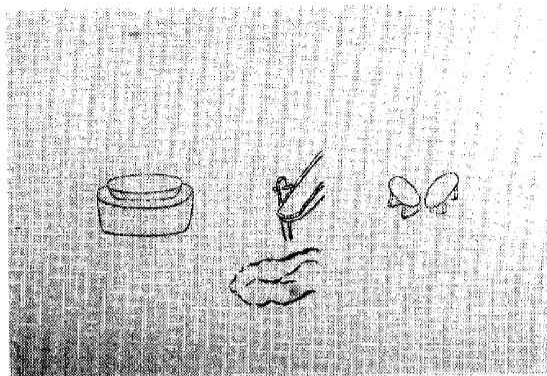
北野-34



北野-30



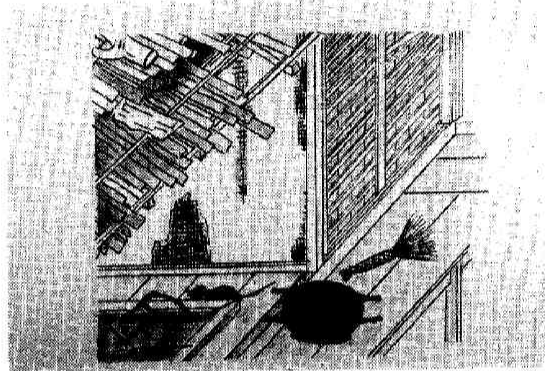
絵師- 4 (539)



北野-35



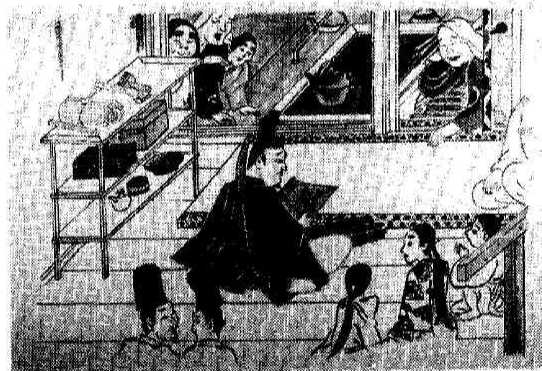
絵師- 5 (540)



絵師- 1 (536)



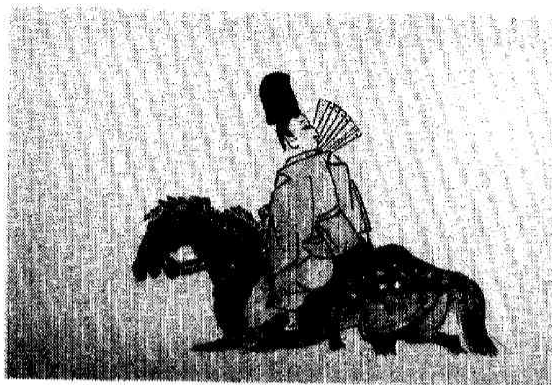
絵師- 6 (541)



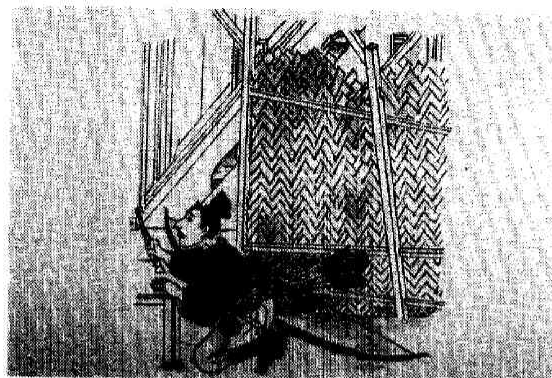
絵師- 2 (537)



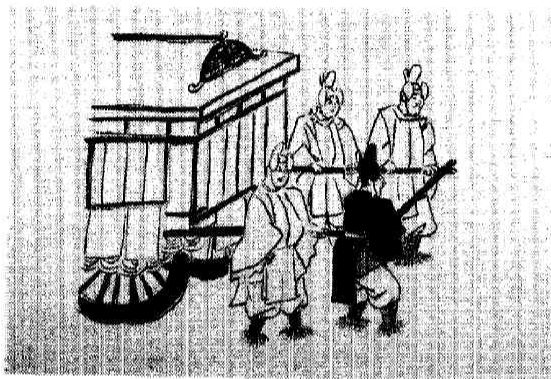
絵師- 3 (538)



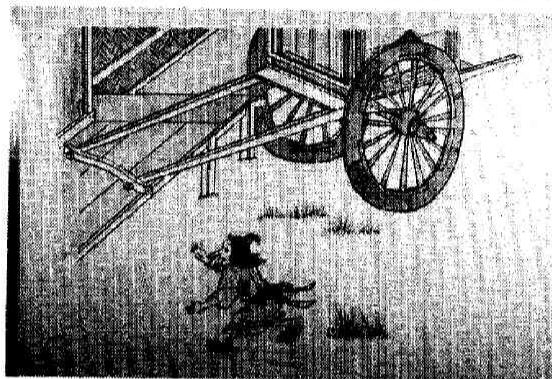
絵師-11



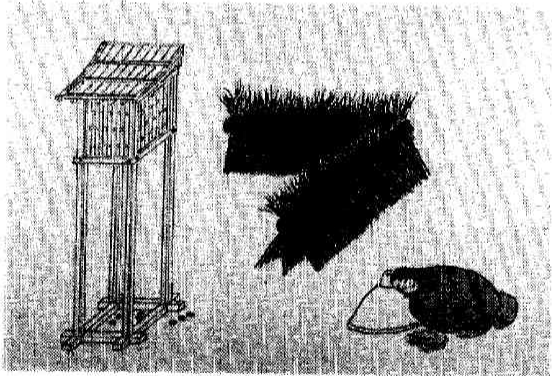
絵師- 7 (541)



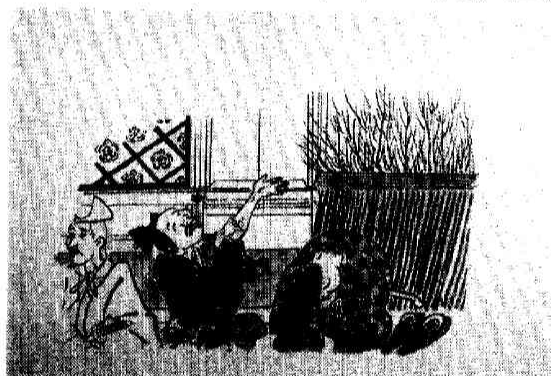
石山寺- 1 (441)



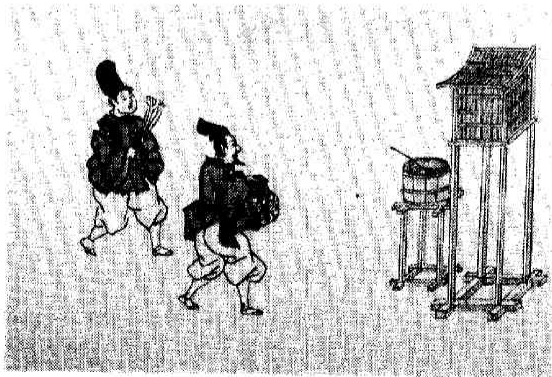
絵師- 8 (542, 544)



石山寺- 2 (442, 458, 488)



絵師- 9 (543)

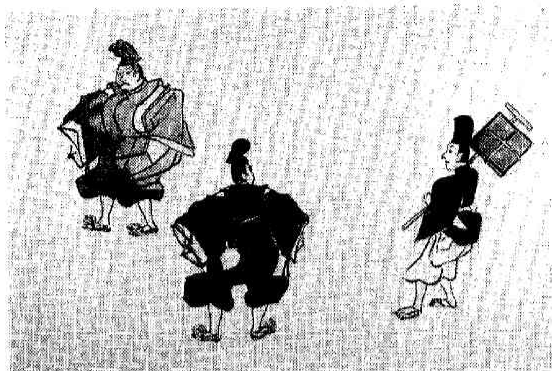


石山寺- 3 (443, 458)



絵師-10 (544)

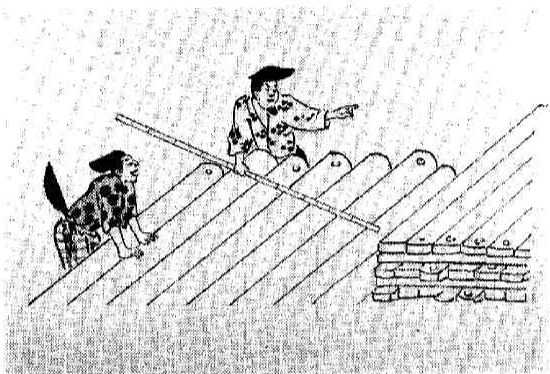




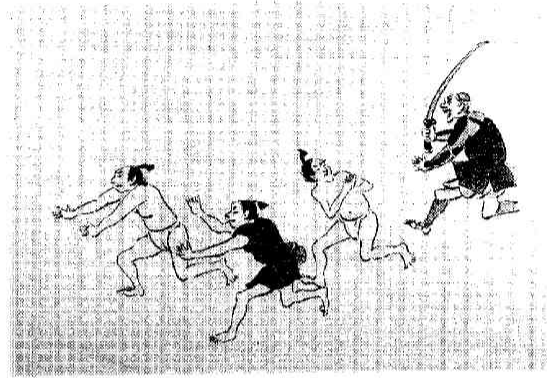
石山寺-8 (447, 448)



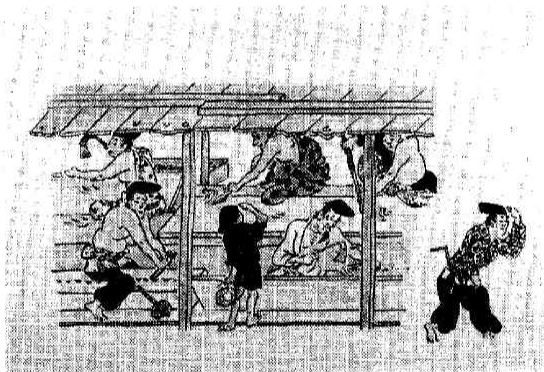
石山寺-4 (447, 483など)



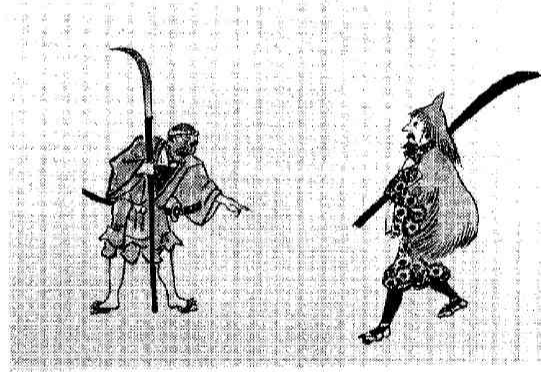
石山寺-9 (460)



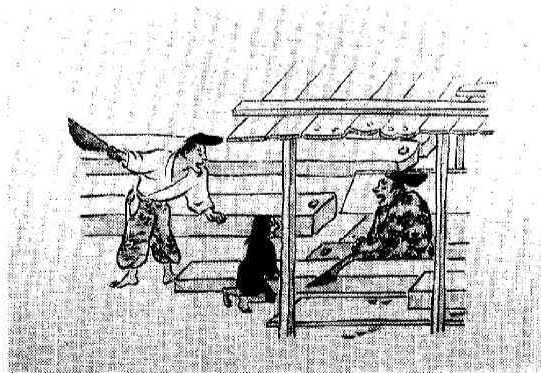
石山寺-5 (444)



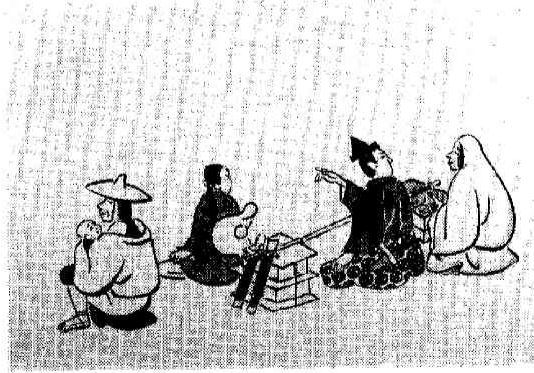
石山寺-10 (460, 462)



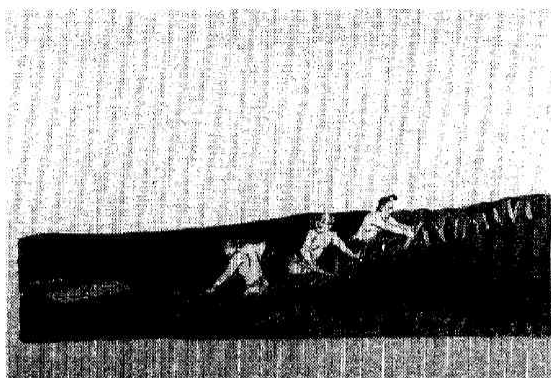
石山寺-6 (444, 446)



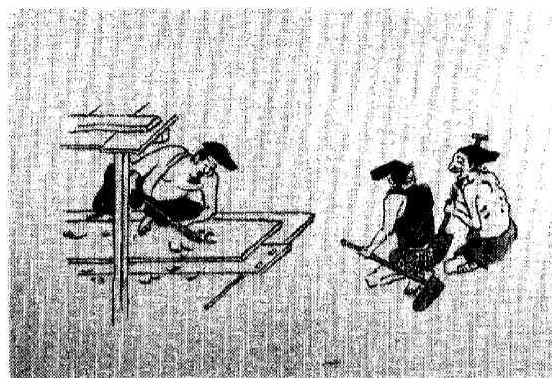
石山寺-11 (461)



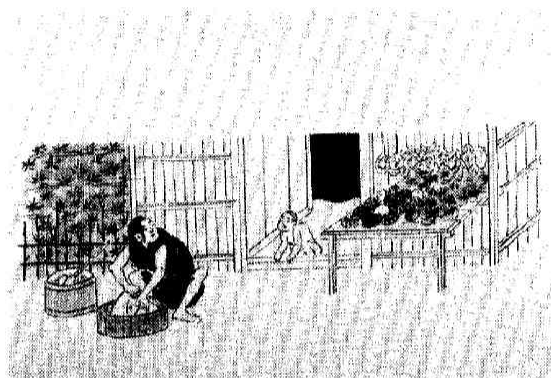
石山寺-7 (445)



石山寺-16 (466)



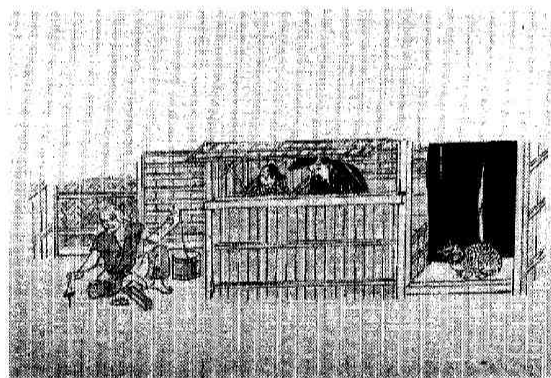
石山寺-12 (460, 462)



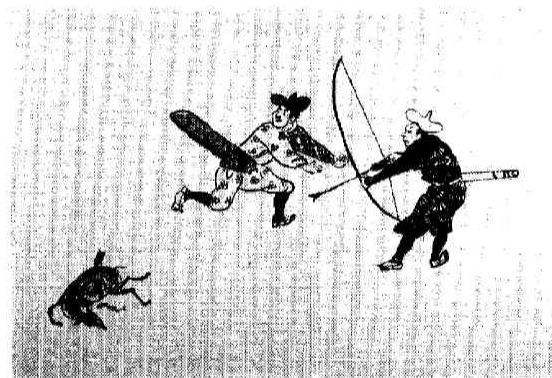
石山寺-17 (467)



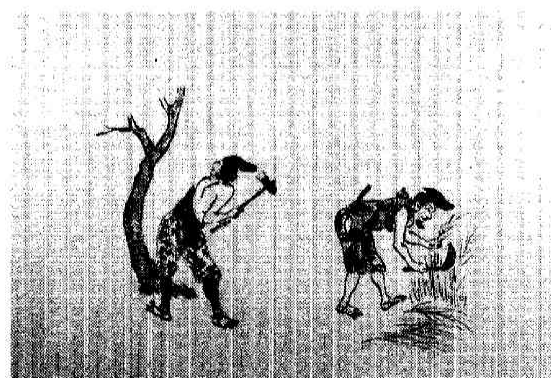
石山寺-13 (463)



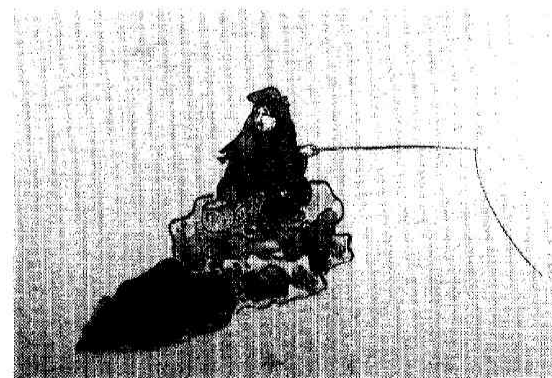
石山寺-18 (467)



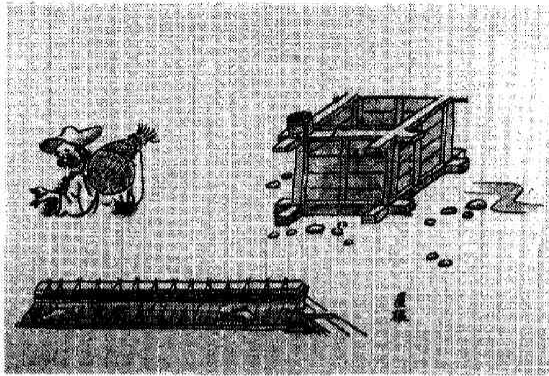
石山寺-14 (463)



石山寺-19 (476)



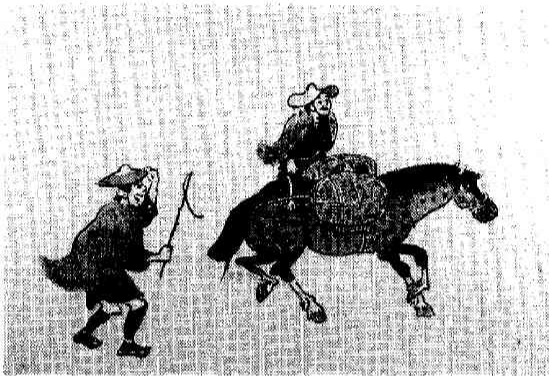
石山寺-15 (464)



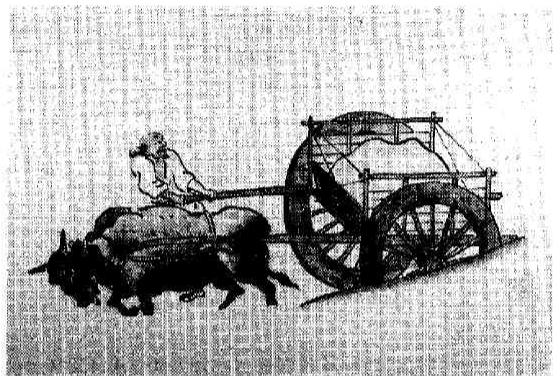
石山寺-24 (470など)



石山寺-20 (476)



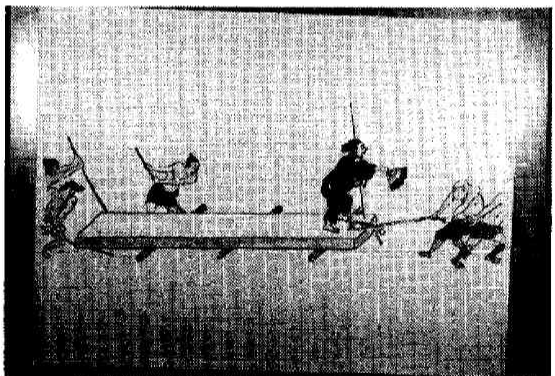
石山寺-25 (471)



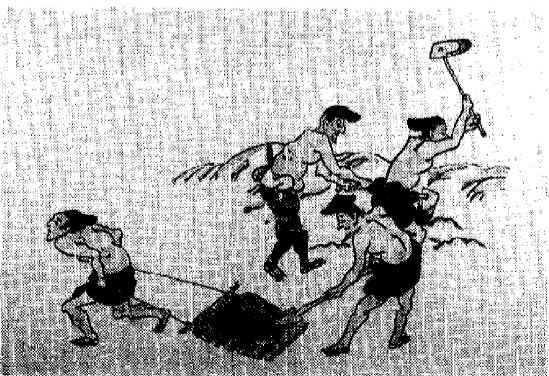
石山寺-21 (468)



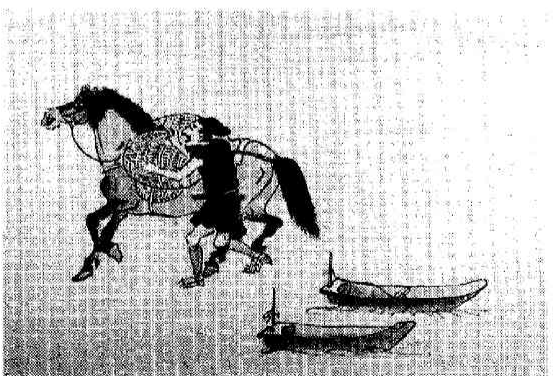
石山寺-26 (472)



石山寺-22 (469)

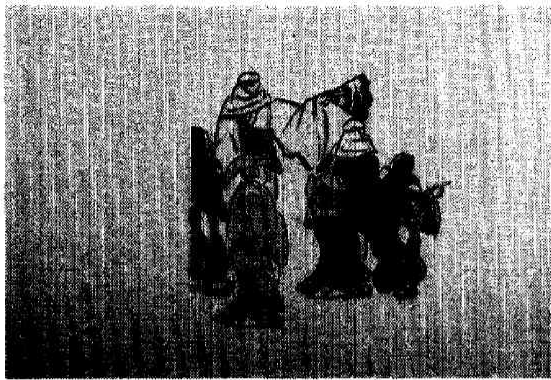


石山寺-27 (477)

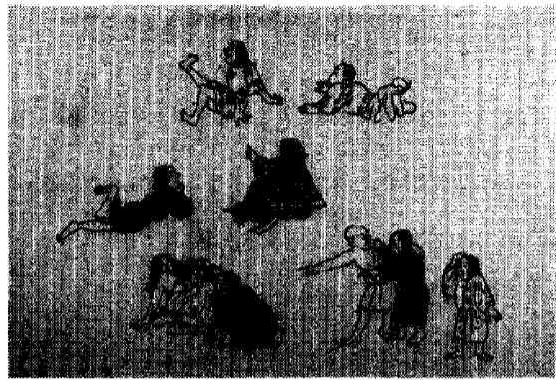


石山寺-23 (470)

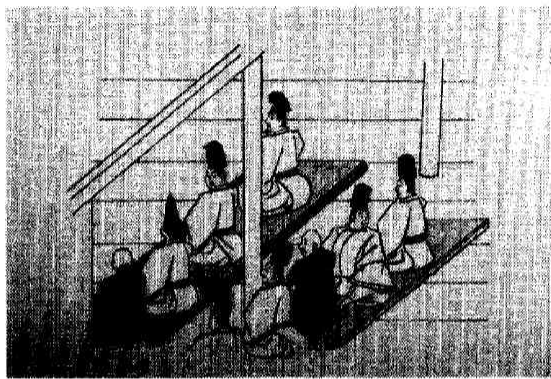




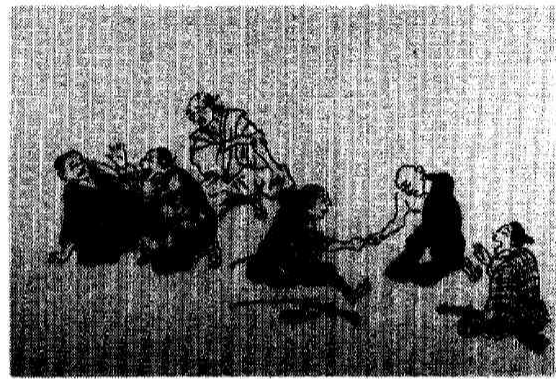
石山寺-32



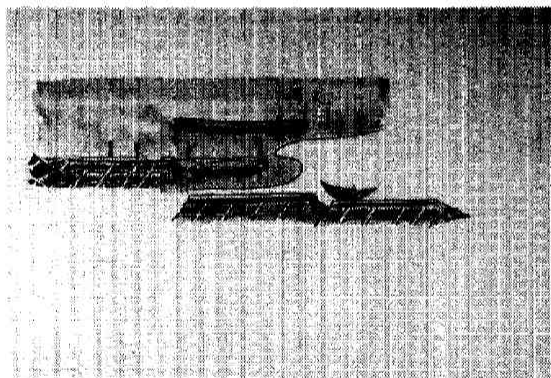
石山寺-28 (482, 484)



石山寺-33



石山寺-29 (485)



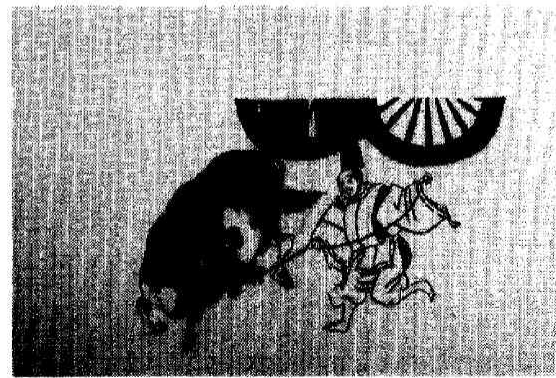
石山寺-34



石山寺-30 (494)



西行-1 (355)



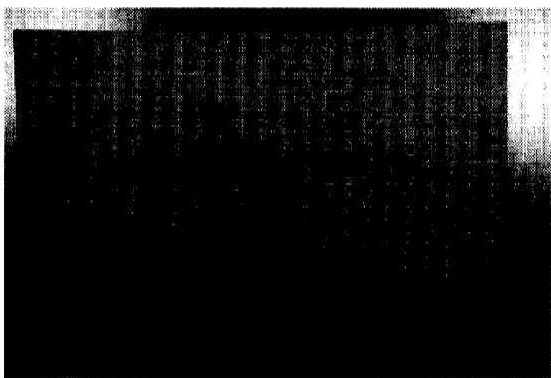
石山寺-31 (497)



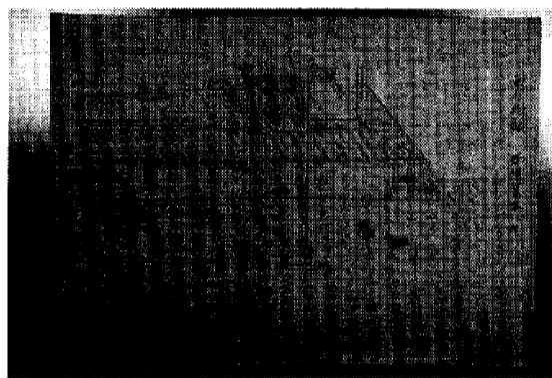
西行- 6 (364)



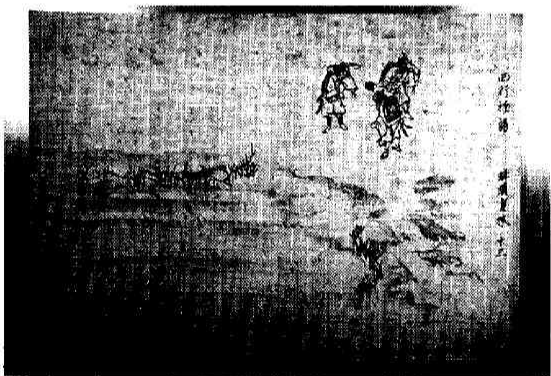
西行- 2 (356)



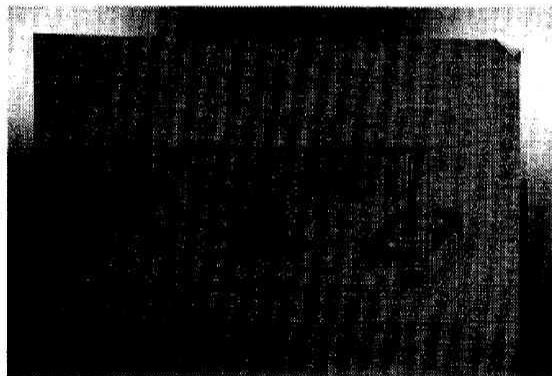
西行- 7 (365)



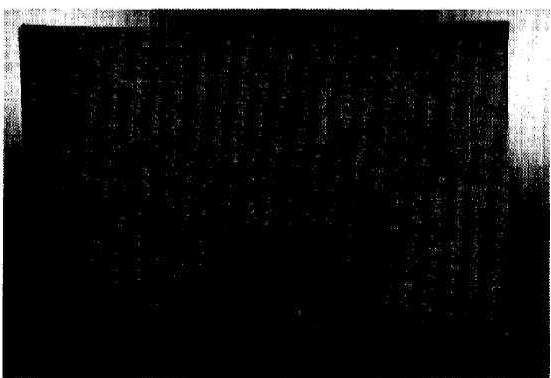
西行- 3 (357)



西行- 8 (366)



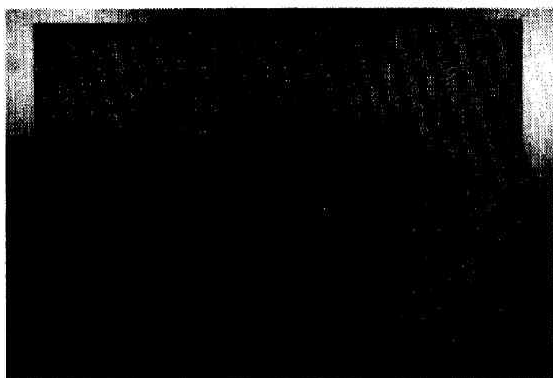
西行- 4 (360)



西行- 9 (367)



西行- 5 (363)



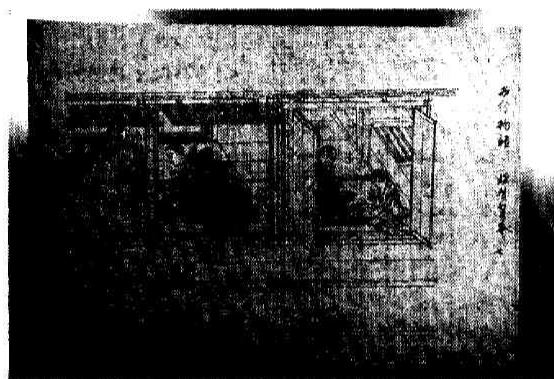
西行-14 (373)



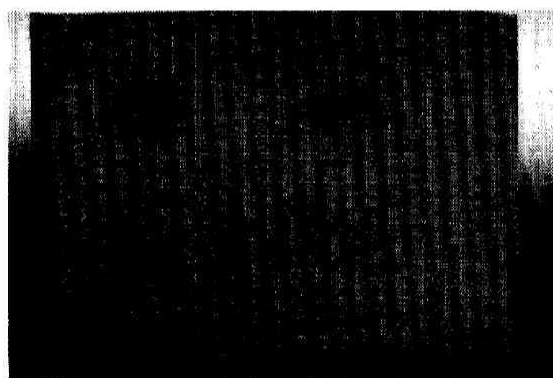
西行-10 (369)



西行-15 (354, 361)



西行-11 (370)



西行-16 (362)



西行-12 (371)



西行-17



西行-13 (372)



西行-18